

新潟県民の外出食についての解析

— 1996年の実態調査から —

本 間 伸 夫

日本型食生活の定着・発展及び米消費拡大を意図して、新潟県米消費拡大推進連絡協議会及び県立新潟女子短期大学による「新潟県民の米消費に関する実態調査」が実施されてきた。そして、そこで得られたデータについて検討・考察した結果を報告書（平成7年度）及び（平成8年度）¹⁾²⁾としてまとめた。

この調査で得られたデータの中から、日本の食生活の現実に関し、その将来に著しい影響を与えると考えられる外出食の項目について、食生活の現在及び将来予測の解析のためには回答者の年齢及び都市化の程度が重要な手がかりと考えられるので、回答者の年代及び居住都市人口規模の立場から検討し考察した。その結果を以下報告する。

この報告から、新潟県民の外出食について最新の実態と今後の見通しを知ることができるものと期待される。

回答者の主な属性は下記のごとくであった。

- ・女性：89.3%、男性：6.7%、無回答：4.0%
- ・年齢20代：6.5%、30代：21.9%、40代：23.9%、50代：19.6%、60代以上：24.8%、無回答：3.3%
- ・妻：87.0%、夫：6.3%、その他：2.8%、無回答：4.0%

回答者の居住地

- ・地域別により、佐渡両津を含む下越：59.2%、中越：29.4%、上越：11.4%
- ・都市人口規模別で、a：10万人以上（新潟、長岡、上越）57.2%、b：5万以上（新発田、新津、三条、柏崎）15.7%、c：5万未満（村上、豊栄、五泉、白根、燕、加茂、見附、栃尾、小千谷、十日町、新井、糸魚川、両津）27.1%。

研究 方法

結果及び考察

1. 調査方法

1997年11月10日～26日、県下20市在住の一般市民で、原則として主婦を対象として、米を中心とした食生活に関する17質問について（※NBリサーチが聞き取り調査した。調査の詳細は解析報告書³⁾に詳しく記述されている。

ここでは、外出食に関わる質問項目を選んだ。その内容は図1に示した如くである。

2. 調査結果

回収標本数：306サンプル（回収率＝68.0%）

1. 回答者の家族構成

年代別及び人口規模別に見た回答者の家族構成は表1に示した通りである。

この表から、平均家族数は回答者30歳代をピークにして加齢に従って減少し、多数を占める家族年代が回答者年代の変化に応じて移動しているのが明確に認められる。回答者50歳代までは、扶養世代の存在が認められるが、60歳代ではそれが認められなくなり、家族の分散、孤独の老後がデータ上に明確に現れている。

回答者の居住都市人口規模別では、年代別ほどの明確な差

Q13. あなたのご家庭での「家族連れ外出食」についてお尋ねします。

（1、2は具体的な数字をご記入ください。3はそれぞれ1つずつお選びください。）

1. 1ヶ月の外出食回数は（ ）回程度
2. 1回当たりの支出はおおよそ（ ）円程度
3. 外出で食べる主な食事は？
○若年層（おおよそ18歳未満） ア. 米飯 イ. パン ウ. 麺 エ. その他
○成人 ア. 米飯 イ. パン ウ. 麺 エ. その他

Q14. 外出をする際に、どのようなことが気になりますか？（2つまでお選びください）

1. 安全や衛生面が気になる	具体的には：
2. 栄養面が気になる	
3. 味付けや、好みなど嗜好（しこう）面で気になる	
4. 経済的な面が気になる	
5. 特に気にならないことはない	

図1 調査票（部分、Q13、14）

表1 回答者の家族構成

回答者年代別の家族構成 (%)

家族年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	≥60	平均家族数
回答者20代	24.39	1.22	37.80	10.98	6.10	14.63	4.88	4.1
回答者30代	29.25	13.84	0.31	34.28	7.55	0.94	13.84	4.7
回答者40代	5.71	29.21	9.21	0.63	38.73	6.03	10.48	4.3
回答者50代	4.93	5.83	26.46	4.48	1.35	43.50	13.45	3.7
回答者60代	5.86	3.15	4.95	9.91	4.95	4.05	67.12	2.9
全体	13.36	13.53	11.29	13.10	14.22	12.07	22.41	3.9

回答者居住都市人口規模別の家族構成 (%)

家族年齢	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	≥60	平均家族数
a	14.99	14.84	10.34	15.29	14.84	11.09	18.59	3.80
b	11.86	11.30	12.43	11.30	11.86	13.56	27.68	3.70
c	10.76	12.03	12.66	9.49	14.24	13.29	27.53	3.80
全体	13.36	13.53	11.29	13.10	14.22	12.07	22.41	3.80

が認められないが、人口10万以上のaでは20歳未満の若年層の割合が多く、60歳を越す老人層が少なくなっていることが認められる。この点bとcは類似している。

表2 年代別の平均外食回数

年代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
回数	2.00	2.18	1.56	1.43	1.68

1. 家族づれ外食の回数、支出、主食について (Q13)

1-1. 外食の回数

全世帯についての1月当たりの「家族づれ外食」回数は図2の如くであり、約1/4が外食をしなく、する場合には大部分が1~3回である。

基礎データ(当該質問に回答を得た個々のデータの総て)から算出すると全平均は月1.6回余である。この値は前年の結果¹⁾とほぼ同一である。この値が変化しないのは、頭打ちと見るか、不景気が停滞しているためと見るか、外食回数の今後の趨勢については引き続き様子を見守る必要がある。

年代別の世帯別の1月当たりの平均回数は表2の如くであって、30歳代をピークにして加齢とともに減少する傾向を有するが、60歳代で再び増加している。

年代別に回数の比率を示したのが図3である。外食しない(0回)が30歳代を最少にして、解答者の加齢に従って増加する傾向は明きらかである。また、60歳代では、外食しない世帯とかなり頻繁にする世帯に分かれ傾向が認められる。そのため、平均回数が表2に示すように40、50歳代よりも増加している。これらの傾向には、体力、経済力、子供などの家族構成、外食環境、時間的余裕などの因子が交錯して影響しているものと考えられる。

住居都市の人口規模との関係は表3の如くであって、明きらかに、大都市ほど外食回数が増える傾向が認められる。この傾向は前回の調査結果¹⁾と同じである。大都市ほど外食環境の密度が高くなるためと考えられる。表2から若い世代ほど外食回数が多いこと及び大都市ほど若い世代が多いこと(表1)も影響しているものと考えられる。

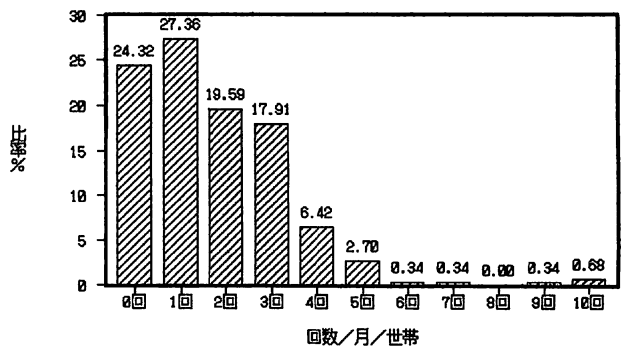


図2 1月当たりの外食回数の分布(全体)

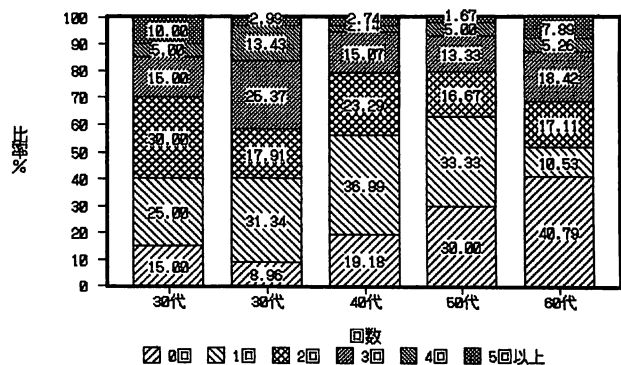


図3 1月当たりの外食回数の割合(年代別)

図4の外食回数の割合からは、明確な傾向が認められなく、人口規模の影響は殆ど認められない。

表3 人口規模別の平均外食回数

都市	(a)10万以上	(b)5~10万	(c)5万未満
回数	1.89	1.62	1.52

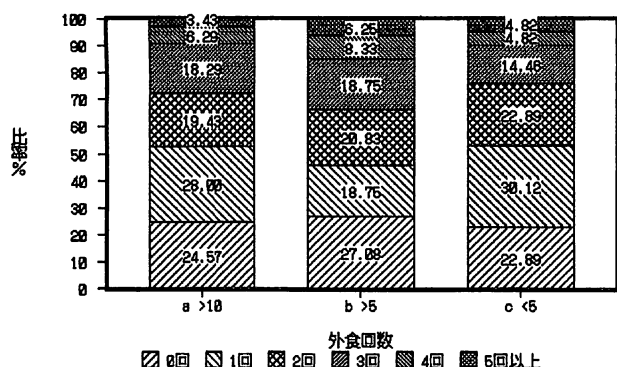


図4 1月当たりの外食回数の割合 (都市人口規模別)

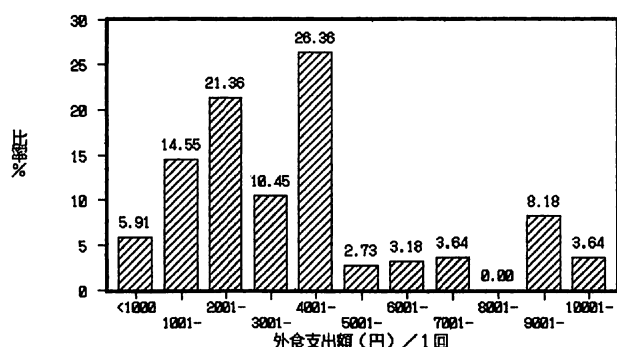


図5 1回当たりの外食支出金額の分布 (全体)

1-2. 外食への支出

1回の外食での平均的支出金額は図5の如くに分布しており、1000円台から4000円台が大部分である。

基礎データからの算出によれば、1回当たりの平均支出額は4,960円前後であり、1世帯1月当たりの平均支出額は全体では約7,940円となる。ちなみに、前年度の値は、それぞれ4,130円及び6,610円であり、約20%の増加である。

前年度と比較すると、回数はほぼ不変であったが、金額は増加しており、やはり外食増大の傾向は維持されていると言えることができる。

全国的な家計調査³⁾によれば、給食を除いた一般外食支出は1世帯1月当たり11,740円であるが、本調査の「家族づれ外食」とは内容が異なるので比較できない。例えば、本調査では勤務先での昼外食は含まれていない。

外食経費について、年代別にまとめて示したのが表4である。年齢の影響を外食回数において認めたが、支出金額についても認められる。回数は若い年代に多かったが、1回当たりの支出は50歳代が最高となった。60歳代でその経費が減少している主な原因は家族数が少ないこと(表1)及び本人の摂食量の減少などが考えられるが、収入の減少も関与してい

表4 年代別の外食金額 (円)

年代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
1回の支出	3425	4178	6106	6169	4245
1月の支出	6850	9108	9518	8822	7132

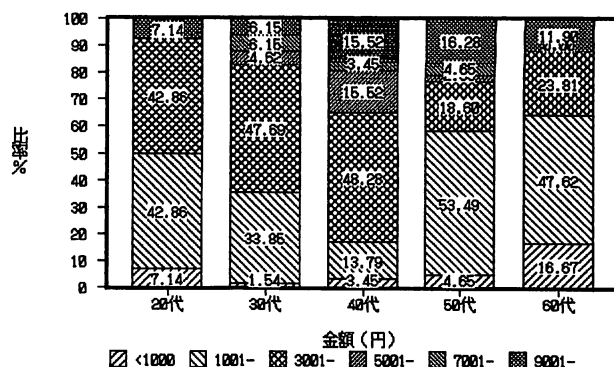


図6 1回当たりの外食支出金額の割合 (年代別)

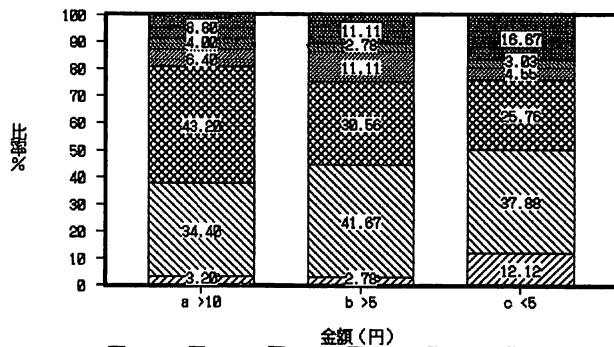


図7 1回当たりの外食支出金額の割合 (都市人口規模別)

るのであろうか。

各年代別の1回当たりの外食への支出額の割合は図6の如くである。1回当たりの金額の低い1000円未満から3,000円までの支出(図の<1,000及び1,001-の両者)は40歳代までは減少し、以降加齢に従って増加しており、逆に高額な7,000円を越す支出は50歳代までは増加し60歳代では減少している。

こうした傾向は、世帯の家族人数と構成、経済力、年齢変化に伴う摂食量の増減などの幾つかの因子が影響しあっているものと考えられ、複雑である。

各人口規模別の1回当たりの外食への支出額の割合は図7の如くである。1回当たりの金額は、1,000円未満から3,000円までの低額支出(図の<1,000及び1,001-の両者)は人口規模の減少に伴って増加するとともに、高額支出の9,000円台以上も増加し、中間の3,000~4,000円台が著しく減少している。これらの傾向には、表1に示したように、家族構成が影響しているものと考えられる。

1-3. 外食で食べる主食

この調査で想定している外食は食事として完結したものであって、日本食独特の「主食」がやはり中心となっている。

その主食が何であるかは、本調査の狙いである米の消費拡大の面から関心があるところである。

回答者の年齢に加えて、喫食者自身について18歳で区切って、18歳未満の若年とそれをオーバーした成人に分けて回答をもらった。

図8以降に示された結果から全体について見ると、若年、成人を問わず主食は米飯と麺が大部分であってパンは極めて少ないことが認められる。

1) 回答者の年代から

a. 喫食者が若年層の場合

全体として、米飯と麺が大部分であってパンは極めて少ない。図8に示した如く、回答者（多くは若年喫食者の両親または祖父母）の年代の違いが強く現れている。

米飯は回答者の加齢に従って確実に増加するが、60歳代では極端に減少している。20歳代では麺と米飯のみであったのが、60歳代では麺とパンのみとなっている。

この変化は、回答者の嗜好によるものか、喫食者である若年層本人の嗜好に由来するのかが問題である。

回答者が20歳代の場合では、殆どが麺である。表1から、この場合の若年喫食者は幼い（0～9歳）可能性が高いと考えられるので、幼児にとって嗜好性が高く、また、食べ易い麺が多くなったものと推定できる。

表1から回答者30～40歳代での若年喫食者は10歳代であるので、図8の結果は大凡10歳代の嗜好ということが出来る。50歳代での若年喫食者については明確ではないが、やはり10歳代と推定される。

回答者60歳代で喫食者が若年の場合は3例に過ぎないので偶然の結果である可能性が高いが、回答者60歳代では喫食者が孫の代である幼児となる場合が多いので、食べ易い麺やパンを好むようになるためと考えられる。

以上のことから判断すると、図8の結果には若年喫食者本人の嗜好が殆どそのまま出ているものと考えられる。

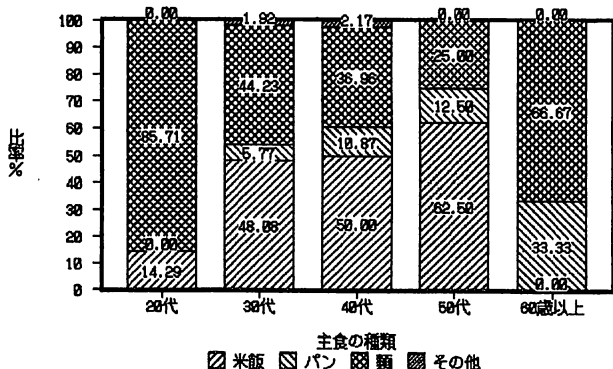


図8 若年層が外食で食べる主な主食の割合 (年代別)

b. 喫食者が成人の場合

図9に示す如く、成人が食べる主食は、若年層の場合と比較すると、回答者の年代の影響がかなり少なくなっている。全体として、パンが少ないこと及び米飯が約6割を確保していることが認められる。家庭内食と違って、選択が容易であ

るのが外食の特徴であるので、図9の結果は成人喫食者の嗜好そのものと言うことができる。

回答者20歳代の場合にパンが比較的多いが米飯も決して少なくないことに注目される。回答者20歳代の場合の成人は表1から大部分が20～29歳であって、即ち喫食者は回答者自身であると言ってよい。最も新しい現時点での20歳代の嗜好であることになる。

回答者60歳代の場合に米飯が減って麺が増えているが、パンが0であることに注目される。必要エネルギーが減る条件下にあって消化良く食べ易い食べ物として新潟県の高齢者は米飯の代わりに麺を選び、パンを選ばない確率が高いことを意味している。

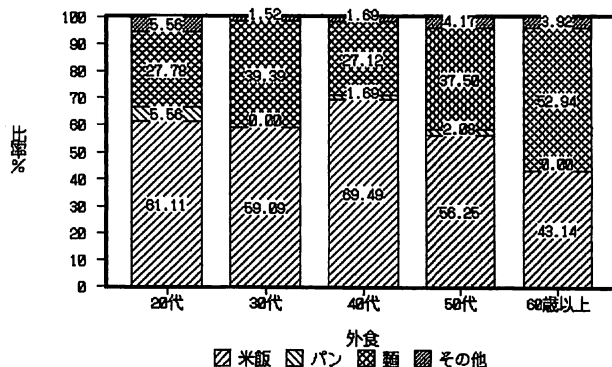


図9 成人層が外食で食べる主な主食の割合 (年代別)

c. 加齢に伴う嗜好変化

図8に示すように、回答者20歳代から50歳代に至るまでの加齢に伴って若年喫食者の嗜好パターンも変化しており、それが図9の回答者20歳代の成人喫食者パターンにつながるものと読み取ることができる。

そのパターンは、喫食者の年齢とともに、米飯をより好む方向を辿りながら成人となって60%前後ではほぼ一定となり、幼児期に好んだ麺が徐々に減少しながら成人で30%前後ではほぼ一定となり、10歳代にかなり認められたパンが成人で減少し回答者20歳代に余韻を残す、というものである。

図9が示すように、外食における主食選択に対する回答者年代（50歳代まで）の影響が少ないことは、成人喫食者は自身の年齢の影響を受けなくほぼ一定であることを意味してい

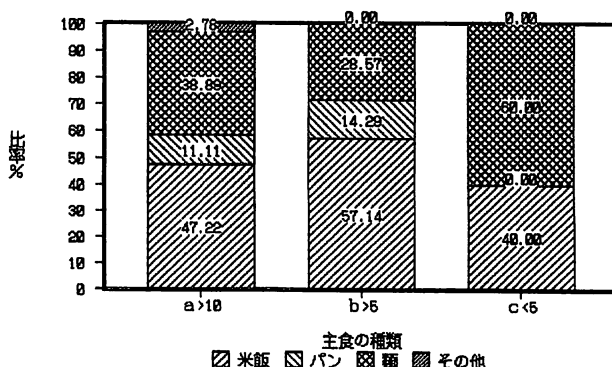


図10 若年層が外食で食べる主な主食の割合 (都市人口規模別)

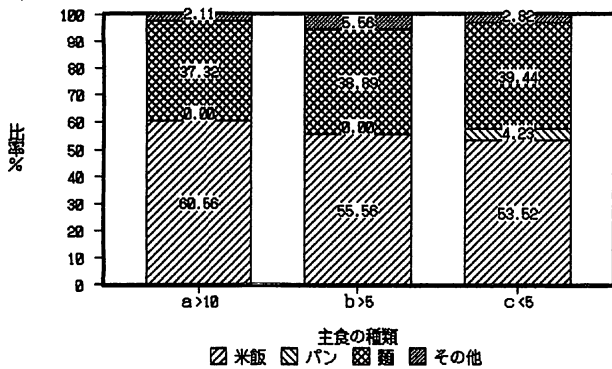


図11 成人層が外食で食べる主な主食の割合 (都市人口規模別)

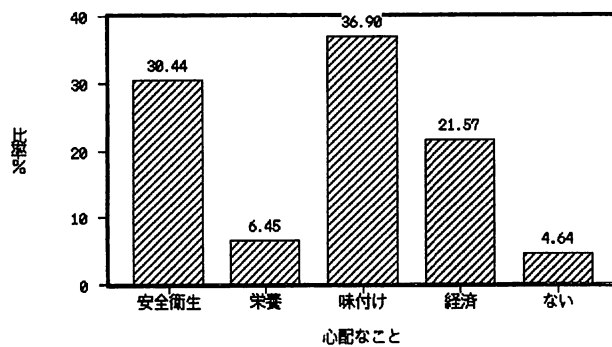


図12 外食に当たって気になること (全体)

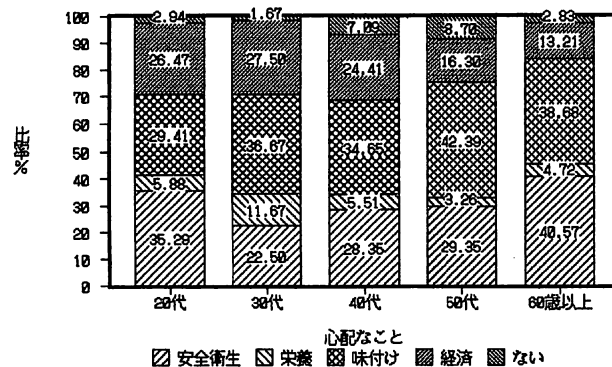


図13 外食に当たって気になることの割合 (年代別)

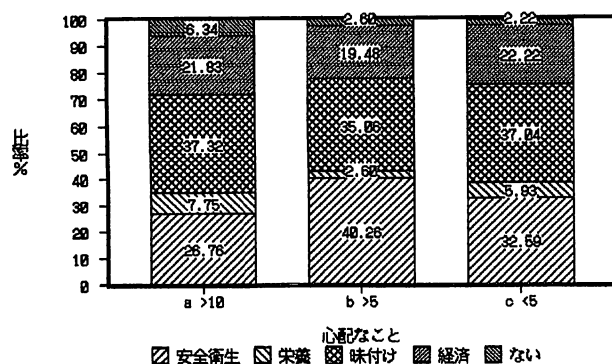


図14 外食に当たって気になることの割合 (都市人口規模別)

る。それは、表1から回答者の加齢に従って喫食者自身も加齢しているにも拘らず外食時の主食選択が大きく変わっていないからである。表現を変えれば、60歳代以上を除いて、それに至る迄の成人の嗜好は大きくは変化しないことを意味している。

2) 都市人口規模から

人口規模による変動は図10、11に示したように、若年層の場合は顕著であるが、成人の場合に変化が少ない。また、人口規模との関係も一定の傾向が認められない。

同一県内にあって、この程度の人口格差では主食嗜好にまで影響を与えるところまでは至らないものと考えられる。

2. 外食で気になること (Q14)

食べ物は栄養素摂取、体内摂取、食欲満足、繰り返し摂取という大原則があり、生存上不可欠である。そのため、衛生、安全性に始まって強く求められる幾つかの条件がある。外食はこれらの点を他人任せであるため、心配することが多々あるのは当然である。

外食について心配な点は、図12に示した通りであり、嗜好、安全衛生、経済性、栄養の順は昨年と同一である。栄養についてかなり低いのも昨年同様である。栄養は不足よりも過剰さみであることの反映と考えられる。食は確実な繰り返し摂取が求められることから、価格の高低は直ちに家計に響くことから、経済の問題に関心が多いのは当然である。

安全性よりも嗜好性に高い関心があることに興味が持たれる。食全体であれば、特に、本調査の如く回答者の殆どが女性である場合には、心配なことの最高に安全性が来るという結果となることが十分に予想できる。外食の場合はそうではないのは、「外食で最も期待するのは美味しいことである」という市民の外食に対する姿勢の現れと考えることができる。外食では、他のことはあまり気にせず、食事そのものを楽しもうという姿勢である。

年代別以外食で気になることをまとめたのが図13である。経済に関する心配は加齢に従って明らかな減少している。これは、外食支出が加齢に従って減少すること(表4)と関連していると考えられる。安全衛生は30歳代を谷底にして若い年代と老年代において増加している。この30歳代は食への関心が高く、栄養への心配が多く、「心配無い」が最も少ない。

40、50歳代では経済への心配が低く、嗜好性への関心が高いのは、生活に余裕が生まれるためであろうか。

都市人口規模別では、図14に示すように、一定の傾向を見出すことができない。強いて言えば、大都市では安全衛生よりも嗜好性に関心が高い傾向が伺われることである。

要 約

日本型食生活の定着・発展及び米消費拡大を意図して実施された「新潟県民の米消費に関する実態調査」(平成8年)で得られたデータの中から、日本の食生活の現実に深く関連し、その将来に著しい影響を与えると考えられる外食についての

アンケート結果を検討・考察した。特に、食生活の現在及び将来予測のためには市民の年齢及び都市化の程度が重要な手がかりになると考えられるので、その両者の立場で検討した。

標本数は県下20都市在住市民から得られたもので306。調査内容は、家族づれ外食の回数、1回当たりの金額、1ヶ月当たりの出費、外食で食べる主食の種類、外食で心配な点などについてである。

得られたデータを回答者の年代(20、30、40、50、60歳代)及び都市人口規模(10万以上、5万以上、5万人未満)に分けて検討し考察を加えた。

新潟県民の外食に関するホットなデータなど多数得られた中から、幼児から高齢者までの加齢に伴う米飯、麺、パン等に対する選択の変遷は興味ある結果であった。また、新潟県民の外食に対する姿勢は嗜好優先というものであった。

この報告から、新潟県民の外食について最新の実態と今後

の見通しを知ることができるものと期待される。

終わりに当たって、本解析の基となった「新潟県民の米消費に関する実態調査」の実施にご協力頂いた市民の皆様に感謝致します。

文 献

- 1)本間伸夫、姉齒暁：新潟県民の米消費に関する実態調査—資料の解析報告書—(1996.3.29)新潟県米消費拡大連絡協議会
- 2)本間伸夫、石原和夫：新潟県民の米消費に関する実態調査—資料の解析報告書—(1997.3.29)新潟県米消費拡大連絡協議会
- 3)総理府・統計局：平成5年度・国勢調査報告(食料栄養調査会：食料・栄養・健康、No.16、p124(1995)より)